



TITLE:

音楽心理学の体系的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

梅本, 堯夫

CITATION:

梅本, 堯夫. 音楽心理学の体系的研究. 京都大学, 1966, 教育学博士

ISSUE DATE:

1966-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211832>

RIGHT:

氏 名	梅 本 堯 夫 うめ もと たか お
学位の種類	教 育 学 博 士
学位記番号	論 教 博 第 1 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	音楽心理学の体系的研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 倉 石 精 一 教 授 鯨 坂 二 夫 教 授 佐 藤 幸 治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は過去70年間にわたる内外の心理学的資料を収集して包括的な音楽心理学の体系を樹立しようと試みたものである。

第1章における著者の定義によれば、音楽心理学は「音楽的行動（作曲・演奏・鑑賞等）」及び音楽の影響が何らかの意味で、その中にあらわれるような「音楽に関係した行動」を対象とする心理学であり、その方法は一般心理学と同じく、これらの行動を条件分析してその関数関係を求めることである。この立場において収集された資料は、以下の7章に分けられ、体系化された。

第2章では、あらゆる音楽的行動の基礎となる音楽的知覚について、音の高さ・調性・大きさ・音色等の基本問題から、より具体的な旋律・リズム・協和等の問題にわたって、ひろく考察し、その間絶対音感に対する著者独自の見解をのべ、また協和感の発達及び音程判断に関する実証的資料を提供している。

第3章では、音楽的表現とその認知の問題を扱い、主体の情緒的反応を生理心理学的にとらえたGSR、脈搏、呼吸、EEG等の研究を展望し、また音楽的表現の効果については、テンポ・高さ・リズム・和声・調などに分けて、それぞれの効果を分析、比較している。またここでは「現代音楽家の、調の性格についての認知構造」に関する調査を行ない、その結果を詳細にのべている。

第4章では、音楽鑑賞態度に関する諸説を検討したのち、音楽に対するモチベーションの相違による、種々の鑑賞態度やその移行型を指摘している。また音楽の嗜好に関し、音楽専門家の作曲家観を意味微分法によって分析し、4個の因子を見出した。

第5章では、演奏の心理について、その技術習得及び上達の契機にもふれているが、その重点を芸術的逸脱 (artistic deviation) の心理学的考察においている。

第6章では、作曲行動の心理学的分析を行ない、そのモチベーション、技術の習得、創造過程、心像の役割等、従来研究の未開拓であった分野についての問題点を指摘している。また情報理論の音楽への適用に関し、その現状を紹介し、論評を行なった。

第7章では、音楽能力についての教育心理学的考察を行ない、これと知能の関係、この能力の発現の仕方等を考察し、あわせて諸種の音楽的テストの信頼性と妥当性に検討を加えた。

第8章では、音楽の応用について、生産労働、医療、矯正等の諸場面に分けて考察し、応用の将来性、その効用の限界・利害等について検討を行なった。

論文審査の結果の要旨

本論文の概要

本論文は過去70年間にわたる内外の心理学的資料を収集し、それに著者自身の研究成果を加えて、包括的な音楽心理学の体系を樹立しようと試みたものであり、作曲・演奏・鑑賞等の音楽的行動及びその基礎となる音楽的知覚について、広汎かつ詳細に論述したほか、演奏技術の学習、並びに音楽的能力についての教育心理学的検討、音楽の応用等について、体系的な論述を行なっている。

本論文の意義

1. 本論文は困難な問題の一つである音楽の心理学的研究を、かく体系的包括的にまとめたものとしてきわめて卓越したものである。
2. 音楽心理学についての明確な定義にもとづき、首尾一貫した体系中に内外の400余篇の文献を着実に消化し、細部まで検討を加えながら、これを大局的にまとめている。
3. 著者自身による実証的研究数篇は、いずれも独創的なものであり、未開拓分野の研究に寄与するものである。

総合評価

これを要するに、本論文は音楽心理学の体系化を試み、音楽研究の分野に多大の貢献をするとともに、教育学的見地からしても、理論・実践の両面にわたり重要な解明を与えたものと判定する。

よつて、本論文は教育学博士の学位論文としてじゅうぶん価値あるものと認められる。